

2019. 3. 15 会報 NO107	第1回 歴史探訪 自治環濠の平野郷を訪ねる	東大阪文化財を学ぶ会 会長 南 光弘 担当 西田 裕洋
-------------------------	---------------------------------	-----------------------------------

実施日 4月18日(木) 雨天決行

1. 集合場所 JR衣摺加美北駅
2. 集合時刻 午前9時 解散予定 午後3時頃を予定
3. 費用 昼食代、680円～700円程度。昼食は弁当でなく出来るだけ「食事処」を利用して下さい。食事内容は、当日受付時に2種類のメニューから選んで頂きます。よろしくお願ひします。
4. 案内解説 東大阪文化財を学ぶ会メンバー
5. 参加 事前申込不要、多くの方のご参加を待っています
7. 行程 全行程 徒歩約6km

畠山政長墓、旭神社、平野郷・平野環濠跡、杭全神社、春子姫の墓、融通念仏宗総本山大念仏寺、長寶寺、(昼食・食事処)、全興寺、赤留比売命神社、平野郷樋尻口門跡、平野の黄金水、JR大和路線加美駅

① 正覚寺合戦と畠山政長墓(加美正覚寺)

南北朝時代から室町時代の武将・守護大名(河内・越中・紀伊・山城の守護)であった畠山基國(もとくに)が管領となり、永徳2年(1382)、若江城が守護所、防衛施設として築城された。

畠山氏の家督が満家、持国と続いたが、持国の死後享徳3年(1454)、庶子である義就が家督を継いだ、が、養子となっていた弟持富の子政長との畠山両家の長期に渡る争いが始まる。以後の経過をざっと見ると、長禄4年(1460)竜田神南山の戦い⇒若江城の攻防、政長が家督を継ぐ

寛正3年(1462)義就が嶽山、金胎寺城で籠城、破れる⇒紀州へ、

寛正4年(1463)政長、河内守護となり若江城へ

文正元年(1466)細川勝元に対抗した山名持豊が義就を再び河内に迎え、將軍足利義政は政長を更迭し、畠山氏の家督を義就に変える。義就が入京する

応仁元年(1467)～文明9年(1477)応仁の乱が始まる。

政長が洛内相国寺に近い御霊森で拳兵(上御霊神社合戦)。山名持豊の後援を得た義就が勝利した。

文明3年(1471)争いは京都周辺に広がり河内は再び戦乱の場に

文明9年、義就、政長方の遊佐長直と合戦。客坊城、往生院城、八尾城、誉田城、若江城が陥落。

応仁の乱、終結。河内守護所は高屋城(羽曳野古市)に移る。河内の実効支配は義就が握る。

文明14年(1482)政長、正覚寺に本陣をおき、誉田城の義就と対陣

明応2年(1493)正覚寺合戦、政長敗死。義就死後河内の平定に乗り出し、將軍足利義種(よしたね)と共に正覚寺に本陣をおく。斯波義寛をはじめ若狭武田氏、赤松氏、京極氏、越前朝倉氏も加勢。しかし、一人京に残った細川政元がクーデターを起こし義就の息子義豊に加勢、4万余騎の兵を正覚寺に送り込んだ。不利な戦いに政長はあえなく自害した。この兵火のため壮さを誇った正覚寺の大伽藍も焼失した。



② 旭神社

祭神は旭大神で、素盞鳴尊・旭牛頭天王の総称。現在までに、天照大神・春日大神・堅牢地神・諏訪大神・

公守大神・勝手大神・丹生大神・嶋戸大神を合祀している。

神社の由来を記した『河内国渋川郡賀美郷橋嶋荘正覚寺村旭牛頭天皇若宮八幡宮縁起』によると、

「若宮八幡宮は、天平勝宝6年（754）、風雨が止まず人々が大変困っていた時、「水上より櫛笥と橋を流しそのとどまった所を祝い、祭るのであれば水難を避け人々を安穩にさせよう」との八幡宮のお告げがあった。大和国河内国の境からお告げのとおり櫛笥(くしの箱)と橋を流した。櫛笥の流れ着いた所には「玉櫛明神(津原神社)」を祭りし、また“橋”は当神社の鎮座地、賀美郷の川中の小島、すなわち当地に流れ着き、そのことが時の孝謙天皇のお耳に達し東大寺の八幡宮(手向山八幡宮)を勧請して若宮と仰ぎ祭り、橋をご神木と定めた。」と、その鎮座の様子を伝えている。

当初は風雨を止めるために創祀されたが、いつしか雨乞の宮と唱えられ、崇敬されたという。

平野郷は環濠集落で有名で、当社の鎮座する加美正覚寺地区も環濠集落で、当社の北と西と道はその名残である。濠の出入り口を守っていた地藏尊が今も残っている。

平野川から船で天満大阪に酒、繰綿などの平野の産物を運んだ船が柏原船と呼ばれた。当社の本殿腰板に保存されている。

若宮八幡宮の御神木として祀られた橋は現在、確認できないが、境内にはクス・イチヨウ・ムクの巨木がある。クスノキは、幹周2.5m、樹高20m、樹齢は推定500年。府の天然記念物に指定されている。イチヨウは2棟の拝殿の中央にあり、幹周1.9~2.5m、樹高20m、樹齢は推定400年。3本のイチヨウが根元でくっついている。ムクノキは、幹周2.8m、樹高17mの市の保存樹、幹周1.9m、樹高18mの府の天然記念物のものがある。

③ 平野郷・平野環濠跡

«”平野”の地名»

”平野”の地名は征夷大将軍年の坂上田村麿(麻呂)の第2子廣野麿(麻呂)が朝廷よりこの杭全荘を賜り、この地を治めていたので、平野は廣野が転訛したものと伝えられている。地名の平野は嘉元2年(1304)の大徳寺文書に見えるのが最初で、以前より用いられた杭全庄と併用され、近世初頭になって平野が定着した。

平野郷の範囲は摂津国住吉郡の東部に属し、現在の平野と東住吉区にまたがる東西2.5km、南北2.7km、総面積360haの地域で平野川の自然堤防上に位置している。ちなみに現在の平野区は、昔の摂津国住吉郡にあたる平野と喜連、河内国丹北郡の瓜破と長吉、河内国渋川郡の加美、そして長吉は志紀郡の時もあったと推定され、二国四郡に及ぶ地域の集合体であり、今もそれぞれ独自の歴史的風土を持っている。

平野には新羅の天日槍につながる赤留比売命を祀る三十歩赤留比売神社や、呉の織工伎人の伝承を持つ喜連、東に鞍作、西および北西部には百済人の居住地とされる地域があり、また坂上氏の祖先も百済系であるなど、平野周辺の開発は、渡来系氏族に負うところが大きい。

«莊園時代の平野»

平野に定住した広野麿の子孫は、黒瀬(または井上)、末吉、成安、三上、土橋、辻葱、西村などの七名家(しちみょうけ)によって、10世紀から15世紀にかけて泥堂(でいどう)、野堂、西脇、流、市、背戸口、馬場の各地域を開発し始めていた。11世紀初頭に、国に税を納めなくてすみ、国司の支配を受けない不輸不入の特権を得るべく、坂上氏はこの地を名目上藤原氏に寄進し、平等院領となるのであるが、その運営は引き続き杭全神社の宮座を通じてなされていた。

«自治都市・平野»

南北朝から戦国時代にかけて、摂河泉の中継点にあたり、交通の要衝である平野周辺を確保しようとする勢力によって、度々戦禍に巻き込まれた。そこで郷民は自らの生命と財産を守る手段として、町の周囲に二重の濠と土居を築き、遠見矢倉を設けて外敵の奇襲に備え、13の出入り口に惣門を構えた強固な防御施設を持つ自治都

市を造り上げた。

その背景には平野の商人の活躍があった。その代表が七名家の筆頭末吉家で、荘内の租税徴収を請け負って得た富を資本にして、堺の馬座、越前北袋銀山の採掘、全国の港湾出入りの認可など、商業活動の諸権利を獲得、豊臣秀吉の死後、徳川家康に仕えた末吉勘兵衛利方は、大津代官となり建議して銀座を伏見に開設、その頭取として同族3人と運営に参加、慶長9年（1604）からは、孫左衛門吉安は子息長方と共に、朱印船末吉丸でルソンなど海外へ雄飛した。こうした富裕な商人の経済力は町民を中心とする、地域共同体としての連帯を強化し、自治的意識の向上につながっていった。

《近世の平野》

争いを回避した平野は堺と共に信長の直轄地となり、秀吉もこれに倣ってこの地を北政所の所領とした。そしてそれまでの自治権はなくなったが、年貢の年寄請や金納など地下請時代の特色は残されていた。

秀吉は大坂に城を築くと共に町づくりを始め、平野の商人を多数移住させていて、今も東平町（東平野町）平野町、末吉橋などの地名に名残りを止めている。また道頓堀は平野七名家の成安道頓兄弟と平野藤次が、久宝寺の安井治兵衛と共に開削を始めたものである。

大坂の陣では平野郷を豊臣、徳川方双方が確保すべき所として争い、その戦火によって杭全神社付近を除いてすべて焼失してしまった。

大坂夏の陣の後の元和元年（1615）、家康は末吉吉安を代官にすると共に平野郷の復興を命じた。現在も残る町割りが完成したのは元和2年3月である。高台院が没した寛永元年（1624）直轄領に戻った平野は、元禄7年（1694）柳沢吉保に給与され、初めて大名領となった。明治維新まで本多、松平、土井各氏が領有した。平野郷町の町政は七名家筋の惣年寄を中心に、総会所を以て一郷を支配し、その下に七町の会所を預かる町年寄と、村方の年寄が惣年寄によって任命され、町を治めていた。江戸時代を通じて、この行政組織を利用し、各大名は惣年寄に土分としての役銀を給与して、惣年寄を支配することによって町を統括していた。

《坂上田村磨とは》

4世紀後半に百濟から渡来した阿知使主を祖とする渡来系の氏族「東漢氏」の一族で檜隅から高取町域に定着し、その後多くの氏に分裂し、それらの氏は住みついた所の地名を氏として、それぞれ発展していた。坂上氏は、高取町大字観覚寺（かがくじ）小字坂ノ上一帯に居住し、坂上氏と称して飛鳥時代から平安時代にかけて武門の氏族として発展していった。姓は始め直（あたい）、682年に連（むらじ）、685年に忌寸（いみき）、764年に大忌寸、785年に大宿禰（おおすくね）と改姓している。大字観覚寺には、小字坂ノ上に坂上田村麻呂の邸宅があったとの伝承が今日にも伝わっている。

坂上氏が歴史の表舞台に現れるのは、壬申の乱で東漢氏一族がこぞって大海人皇子（吉野朝廷）に味方し、そのなかでも坂上氏の軍事的活躍はめざましく、たとえば大伴吹負と共に飛鳥古京に攻め入り、古京を陥れ大友皇子（近江朝廷）の有力な拠点を、逆に大海人皇子側のものとした。この功により坂上氏一族は昇進し、田村麻呂の祖先である坂上老（おゆ）は直広耆（ちよくこういつ、正四位下に相当）の位を与えられた。



④ 杭全神社

坂上田村磨の子広野磨がこの地の開墾領主となり、その子の当道が862年（貞観年間）に氏神として素戔男尊を勧請して祇園社を創建したのが第一殿である。後世、熊野詣が盛んになり1190年（建久元）熊野証誠権現（伊弉諾尊）を勧請して第三殿（証誠殿）が築かれた。さらに1321年（元亨元）熊野三所権現（伊弉冉尊・速玉男尊・事

解男尊)を勧請建立したのが第二殿である。この時、後醍醐天皇より「熊野三所権現」の勅額を賜っている。詔勅によって熊野権現社が総社となり、第一殿の祇園社と並び称される。

明治になって社号は杭全神社と定められ本来の祇園社を本社とした。

社殿は第一殿 春日造 正徳元年(1711)春日大社より移築されたもの。第二殿 流造 永正10年(1513) 第三殿 春日造 永正10年(1513)。三殿とも国指定重要文化財

現在も広大な社域には、参道標柱横にある老木、地上目通りの周囲10mを越え、高さ30mに達する。神木の大楠・樹齢は約1000年。府の天然記念物。拝殿近くに樹齢500年を越える老木、垂乳根の銀杏があり、乳の出を良くしたいと願う人たちのお参りが絶えない。大阪市の保存樹に指定されている。

また、拝殿前に青銅製の狛犬があるが、その足に種々の紐が結ばれている。「走人足止め」の祈願の紐である。さらに、環濠の遺構が社域内に残っており伝統のある貴重な神社である。

⑤ 春子姫の墓

杭全神社に隣接した長寶寺の墓地にある「坂上春子姫」の墓。「春子姫の墓」の横には坂上家一族の墓がある。

※坂上春子姫(生年不詳～承和元年834)坂上田村麿の娘であり、桓武天皇の妃で、天皇崩御である806年(延暦25)後、兄である、坂上廣野麿の居る廣野庄(後の平野庄)に来て、弘法大師に帰依して剃髪し、慈心大姉と号した。そして、天皇の廟所として禁輪寺、坂上氏の氏寺として長寶寺を開基した。

※桓武天皇、光仁天皇と夫人高野新笠との長男。天智天皇の曾孫。名は山部。桓武は母が百済王族、武寧王の後裔であったことから百済系の男女を重用して「朕の外戚」と呼び、またその一族の女性を多数後宮に入れた。

⑥ 融通念仏宗総本山大念仏寺

大治2年年(1127)、後鳥羽上皇の勅願により良忍上人(聖応大師)によって開創された融通念仏宗の総本山である。だといわれている。良忍上人が比叡山での修行を終え、さらに仏道を求めようと京都・大原に住まい、平安時代末期の永久5年頃(1117)に来迎院・浄蓮華院を創建。時に良忍上人が46才。阿弥陀如来より「一人一切人 一切人一人 一行一切行 一切行一行 是名他力往生 十界一念 融通念仏 億百万遍 功德円満」の偈文(げもん)を授かり、融通念仏を感得した。平安末期以降広まった念仏信仰の先駆けとなり、国産念仏門の最初の宗派で日本最初の念仏道場といわれる。その後、1182年(寿永元)火災にあい、寺運も衰微したが、元享年間(1321～24年)に深江の7世、法明上人により復興、以来、朝廷・徳川幕府歴代将軍の崇敬あつく、たびたび寄進をうけており、江戸初期の1615年(元和元年)に寺地が定まり、寛永から寛文年間(1624～72年)には、総本山にふさわしい伽藍が営まれた。明治31年(1898)火災により諸堂は消失したが、その後次第に再建され今日に至っている。現在末寺として、主に大阪南部から奈良の生駒周辺・京都南部・三重県名張にかけ、約350寺ほどある。法明上人は惣(郷村)を中心に活動し、念仏共同体として講を組織し、大念仏教団の基礎を築いた。



本堂は、総檜造り銅板葺き。前身建物の焼失後、ほぼ同規模で建設された。入母屋造、平入で、桁行7間、梁間8間、建築面積1217㎡。屋根は本瓦葺を模した銅板葺。内部は小組格天井を高く張り、正側面に縁を巡らし背面側には廊下を通す。昭和13年(1938)再建の大阪府下最大の木造建築。平成15年に国の登録有形文化財指定

霊明殿 鳥羽上皇を奉安する権現造の社殿。江戸時代建造。

山門 棟行3.6m、梁行2.7m、両脇に2.1mずつの壁落ち屋根。霊元天皇皇女、宝鏡寺宮徳巖尼ご親筆「大源山」の勅額。平成18年大阪市指定有形文化財。江戸時代初期建造。

⑦ 末吉家住宅

末吉家は秀吉の時代までは平野姓だったが、秀吉より末吉姓を賜。江戸時代も末吉家は家康などから朱印状を与えられルソンまで貿易に出かけ巨万の富を築いたと言われ、また幕府より5万石の代官にも任じられ商人でありながら幕府直参旗本でもあったと言う不思議な家といえる。

江戸時代途中に末吉家は2つに分かれるが、建物は宝永4年(1707)頃の建設と伝えられ、現在国の登録有形文化財に指定されている。残念ながら内部は公開されていないが、海外まで貿易に出かけていたかつての豪商兼幕府代官の屋敷を一度は外からでも見ておくだけの価値はあると思う。

⑧ 王舎山長寶寺

高野山真言宗の寺院。本尊の十一面観音菩薩は守坂上田村麿の守護仏であるが1.2m位。

山号の王舎山は後醍醐天皇がつけたようで、釈迦が亡くなった時、弟子達が王舎城に集まって、釈迦の教えを話し合った所という。

⑨ 野中山 全興寺 (せんこうじ)

寺伝に、1400前の昔、聖徳太子が、平野の野中の地に小宇を建立して薬師如来の像を安置されたとある。その薬師堂から次第に町が形づくられ「平野」発祥の地とも言われている。本堂は1615年大坂夏の陣で一部を焼失。1661年再建されたもので、大阪府下では古い木造建築の一つ。地獄極楽をめぐる仕掛けがユニーク。

⑩ 平野郷樋尻口門跡と樋之尻口延命地藏尊

戦国時代平野郷は、自衛のため周囲に堀をめぐらし、環濠集落を形つくっていた。そして、13あった木戸口には遠見櫓や門番屋敷が設けられ、傍らに地藏堂が建てられていたという。これらの木戸口は郷内と郷外の境界をなすもので、郷外に出かける人は地藏像に旅の安全を祈り、且つ郷外から侵入しようとする災厄・疫病などをここで退散させようとする祈願の場でもあったという。通常、道祖神が担う役割をここでは地藏が担っていたことになる。樋尻口門は八尾久宝寺への出入口となっていた。少し東側の平野川に「樋之尻橋」の名が今もとどめられている。現在、13の木戸口はなくなったが、地藏堂とその名称によってかつての位置を知ることができる。

この地藏さんは花崗岩造りの等身大の丸彫りの延命地藏尊で、この場所が平野郷周辺に残る、13の出入口の一つ、樋之尻口にあたるのでこの名がつけられた。古くから北向き地藏としての信仰が篤く、地上から頭の先までは、なんと2mに及ぶ大作。伝えによると「大阪夏の陣」の時、ここが徳川方の陣地で、豊臣方の真田幸村がここにいた徳川家康の命をねらってこの地藏堂を爆破したが、幸いにも家康がここにおらず命をとりとめたとか。その代わりに、当時堂内に祀られていた木彫の地藏の首が全興寺まで、ふっ飛んだといわれている。現在の石地藏はその時の木彫の地藏の首をモデルにして造られた、と語り伝えられている。

⑪ 平野の黄金水

平野はもともと低湿な土地柄でそのため井戸水の水質が悪く、そのままでは飲用に耐えなかった。しかし、この井戸は良質の水に恵まれ、多くの住民に利用された。坂上廣野麿により荘園として開かれて以来上水道が普及するまでは、付近住民にとり貴重な飲料水であった。また、平野の酒造業にも利用されるなど自由都市平野郷の発展を支える大きな役割を果たした。

⑫ 赤留比売命神社

平野区平野東の平野公園西南に鎮座する飛地境内社で延喜式式内社である。もとは住吉神社末社五社の一であった。祭神は赤留比売命で、俗に三十歩神社と称され、耳の神様として地元の人達に親しまれている。創建について、社頭に掲げる由緒書には、



『当社の祭神赤留比売命は新羅から来た女神で天日槍の妻と伝える』とあるが、赤留比売命の渡来について、『古事記』応神記では、

「新羅国・阿俱沼（アグヌマ）の畔で昼寝していた一人の女の陰部を太陽の光が射し、妊った女は赤い玉を産んだ。これを見ていた一人の男が赤玉を貰うけたが、新羅の王子・天日槍がこの赤玉を手に入れた。天日槍は、この赤玉を持ち帰って床に置いていたら美しい乙女と化し、天日槍はこの乙女と結婚した。

ある時、心奪った天日槍が妻を罵ると、妻は「吾が祖（オヤ）の国に行く」といって小舟に乗って渡来し、難波に留まった」（大意）とあり、「これは難波の比売許曾神社に坐す赤留比売命という神である」との注記がある。天日槍は、自らの行為を悔やみ、妻のあとを追って日本に渡り、妻のいる難波に向かったが、海上の守護神に行く手を阻まれ叶わなかった。そこで、やむなく但馬国に上陸し、そこで現地の娘・前津見と結婚した。

通常、赤留比売命が祀られた“難波の比売許曾神社”は東成区にある比売許曾神社とされているが、何故か、比売許曾神社の祭神は赤留比売命ではなく、記紀神話に登場する下照比売となっている。

当社が赤留比売神社と称することは、当社が“難波の比売許曾神社”であることを主張するものといえる。

また、三十歩神社と言われる所以は定かではないが、一説には応永年間の干魃の際に僧覚證がこの社殿で、法華經三十部を読誦し雨乞をして靈験があったために三十部と言われるようになったのが、後に過って三十歩と伝えられたと言われている。
(文責 南 光弘)

《お知らせ》

(1) 古代史講座 会場について

3月23日(土) 謎の中臣氏について 講師 山科 威さん

会場は、U-BOX 1F サークル室(商業大学の北側、西消防署東側)

4月27日(土) 空白の4世紀、その前後の「物」 講師 清水常男さん

会場は、東大阪市立社会教育センター 2F 第2・3研修室

最寄り駅、近鉄布施駅北へ400m ☎06-6789-4100

(2) 2019年度 年会費納入のお願い

多くの方々には、すでに納入いただいています。大変有り難うございます。

3月15日現在で未納の方には、払込用紙を同封させていただいています。恐れ入りますがよろしくお願ひします。なお、事務手続き上入れ違いがありましたら、ご容赦お願ひします。

(3) 2019年度の歴史探訪予定表を同封しています。変更などがあれば、その都度連絡させていただきますが、インターネット「歴史と街かど」で検索していただき確認して下さい。

古代史講座の年間予定は各例会の講座名が決まり次第連絡させていただきます。

開催日は、4/27 5/18 6/29 7/20 9/21 10/19 11/30

1/18 2/29 3/21 (都合により、変更することがあります。)